

岡遺跡発掘調査報告書

昭和47年

広島県
岡遺跡発掘調査団

序

最近、道路工事や宅地造成工事などのため埋蔵文化財包蔵地が消滅する例が多くなってきており、遺跡の保存を願う者にとって憂慮される状態にあります。

今回われわれが発掘調査をひきうけた岡遺跡も国道182号線バイパスの建設工事のため破壊される恐れがあることから、県教育委員会と県土木建築部との間で保存について協議が行なわれました。しかし結局遺跡の保存がむつかしくやむをえず事前の発掘調査が実施されたものです。

本遺跡は、当初寺院址あるいは瓦窯址などの遺構が存在するものと想定されており、遺構発見の際の保存方法について検討しておく必要がありました。

しかし、幸いにも調査地域内では寺院関係の遺構は存在せず、破壊された古墳の周濠の一部が発見されただけでした。

岡遺跡周辺には数多くの寺院関係遺跡や古墳が存在していることが知られていますが、ほとんどが未調査のものであり、遺跡の規模や性格についてあきらかでないところが多くあります。

今後は、これらの遺跡、遺物のち密な調査と研究を行なって、備後地方の古代の様相をあきらかにしていきたいと考えています。

最後に、現地調査および報告書の刊行にあたり多大な協力と援助をうけた関係者各位に対し厚くお礼申しあげます。

昭和47年3月31日

岡遺跡発掘調査団

団長 村上正名

副団長 西本省三

岡遺跡発掘調査報告書

目 次

序

I 調査にいたる経過	1
II 岡遺跡周辺の歴史的環境	4
III 調査区の設定と調査の概要	12
発掘調査日誌抄	14
IV 造　構	17
V 造　物	19
a 繩文式土器	19
b 弥生式土器	20
c 墳　輪	21
d 古　瓦　類	23
e 土師質土器	27
VI 総　括	28

図表目次

第1表 神辺平野周辺古墳地名表	6
第2表 備後南部古代寺院跡・古瓦出土地・瓦窯跡一覧表	10
第3表 岡遺跡出土の古瓦類と同様の古瓦類を出土する遺跡一覧表	26

図版目次

図版 1 a 岡遺跡遠景	b 岡遺跡近景
図版 2 a 古墳周濠	b 同上部分
図版 3 a 墳輪出土状態	b 弥生式土器出土状態
図版 4 a 繩文式土器	b 弥生式土器
図版 5 墳輪	
図版 6 a 軒丸瓦	b 軒平瓦・鬼瓦

擇 図 目 次

第1図	岡遺跡付近地形図(アミ目は調査地域)-----	1
第2図	神迎平野周辺古墳分布図-----	6
第3図	猪の子古墳石室全景-----	8
第4図	猪の子古墳実測図-----	8
第5図	備後南部古代寺院関係遺跡分布図-----	9
第6図	調査区配置図(a、bは古瓦出土地点)-----	12
第7図	古墳周溝実測図-----	17
第8図	縄文式土器拓影-----	19
第9図	弥生式土器実測図-----	20
第10図	埴輪実測図-----	22
第11図	丸瓦・平瓦の文様-----	23
第12図	岡遺跡出土古瓦拓影-----	24
第13図	父石遺跡出土瓦拓影-----	26
第14図	備後国府跡推定地出土瓦拓影-----	26
第15図	土師質土器実測図-----	27

凡 例

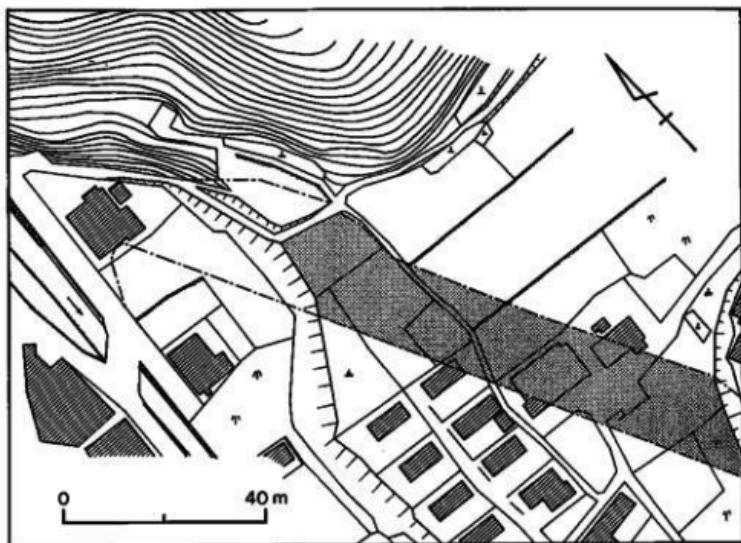
- I. 本報告書は、広島県土木建築部の行なう国道182号線改良工事に伴う緊急発掘調査の報告である。
- II. 発掘調査は、広島県福山土木建築事務所から委託をうけた岡遺跡発掘調査団（団長、広島県文化財専門委員 村上正名）が実施した。なお、広島県福山土木建築事務所、加茂町および加茂町教育委員会、また地元の方々の多大な援助をうけた。
- III. 本報告は、金井亀喜、是光吉基、廣見啓太郎、篠原芳秀、村上正名、山県元が分担で執筆した。
- IV. 出土遺物の整理、実測は上記の者のほか、伊吹尚、小都隆、河瀬正利、中田昭、脇坂光彦があたった。

I. 調査にいたる経過

岡遺跡は、深安郡加茂町中野の、山野へ向かう県道と、神石へ向かう国道182号線の分岐する丘陵上にあり、以前にこの丘陵上に町営住宅を建築するための敷地造成工事を実施中、古瓦が多く発見され、寺院跡または瓦窯跡などの存在する遺跡として注目されていた。

昭和46年9月13日、加茂町教委の熊谷主事から県教委に連絡があり、県土木建築部の国道182号線改良工事により、この遺跡が破壊されそうだという情報をえた。

県教委では職員を現場に派遣するとともに、県土木建築部道路建設課に対して、直ちに工事の一時中止を要請した。



第1図 岡遺跡付近地形図（アミ目は調査地域）

9月28日、公文書で遺跡の保存に協力するよう正式に申し入れ、その後も電話により協議をすすめた。

11月13日、土木建築部よりつぎのような意味の解答があった。一般国道182号線加茂・神辺工区道路改良工事は、昭和45年度より継続実施中のもので、すでに遺跡包蔵丘陵地を除く全線は工事施行済ないし施行中であり、この地域を迂回させた場合には、道路構造令に適合しなくなるので、この遺跡を回避できず、緊急に発掘調査を実施して記録保存の措置を講じて欲しいというものであった。

県教委としても土地買収の状態や工事の施行状況から保存がきわめて困難であることを認め、広島県文化財専門委員の村上正名氏を団長とする調査団を編成し、広島県福山土木建築事務所長との間に、発掘調査に伴う経費負担の契約を結び、12月13日から約30日間の予定で発掘調査に着手した。

なお調査団の編成はつぎのとおりである。

(長) 村 上 正 名

(広島県文化財専門委員・広島大学教育学部付属福山高校教官)

(副) 西 本 省 三 (広島県教育委員会課長補佐兼文化財第2係長)

金 井 龜 喜 (◎ 指導主事)

伊 吹 尚 (◎)

是 光 吉 基 (◎)

脇 坂 光 彦 (◎)

山 縢 元 (◎)

小 都 隆 (◎)

鹿 見 啓太郎 (◎)

中 田 昭 (◎)

篠 原 芳 秀 (◎)

この外、調査にあたっては、加茂町ならびに加茂町教育委員会、広島県道路建設課、広島県福山土木建築事務所、および三好喜三郎氏をはじめとする地元

の方々の多大な協力をうけた。

岡遺跡は、当初寺院跡あるいは寺院に関係のある遺跡、例えば瓦窯跡などが存在するものと想定していた。ところが今回の発掘調査では、調査地域が道路の建設予定地域内に限られたということもあって、寺院跡あるいは寺院に関係のある遺跡の遺構を検出することができなかった。しかし、調査を実施した地域は、北から南へのびる丘陵先端部の緩傾斜地であり、しかも、以前の宅地造成工事の際や、今回の調査区の中からも相当数の古瓦類が発見されていることから見て、なおこの付近に寺院関係の遺跡の存在する可能性が大きいといえるが調査の性格上、この問題の究明は今後の調査にゆだねざるをえなかつた。

このように、今回の調査区からは、後述する古墳の周濠以外の遺構が全く検出されなかつたこともあり、最終的に、発掘調査は、12月25日でもって打切つた。

(金井龟喜)

II 岡遺跡周辺の歴史的環境

岡遺跡は、広島県深安郡加茂町字中野甲田組にある。

この地域は花崗岩からなるなだらかな海拔100～300mの低丘陵地帯である。本遺跡は、この低丘陵に囲まれた芦田川流域に広がる沖積平野(神辺平野)の北縁にあり、加茂川と百谷川に挟まれた天神山より南に延びる丘陵尾根の突端部に位置している。この丘陵は加茂川の河岸段丘の一部として残った丘で、礫・砂の層からなり海拔約35m、付近の平野との比高は約7mである。

この地域一帯に存在する遺跡の大部分のものは100～300mの低丘陵上およびその先端部に位置しており、現在までに確認されているものだけでも、その数は400か所におよんでいる。つぎにこれらの遺跡について時代を追って概観する。

1 原始時代

縄文時代の遺跡についてみると、福山湾や松永湾の周辺部には、大田貝塚(尾道市高須町)や馬取貝塚(福山市柳津町)、洗谷貝塚(福山市水呑町)などの大きな貝塚をはじめ多くの縄文時代遺跡が存在している。しかし、この神辺平野の周辺部では、縄文時代の遺跡は少なく、わずかに、宮脇遺跡(新市町常)神谷川遺跡(新市町神谷川)、神辺町御領丹花の土器包含地など3・4か所がしられているにすぎない。

弥生時代の前期になると、岡遺跡の存在する加茂谷と神辺平野の接しょく部には、広島県東部の標準遺跡とされている龜山遺跡^(註1)が存在し、ちょうど神辺平野の中央に孤立した丘陵の上に前期遠賀川式の土器とともに、おびただしい石器を出土する。ここには前期の層にかさなって、中期の櫛目文式の土器を出し、大規模な住居が営まれていた様子で、当時ようやく開発されつつあった神辺平野の水田を見下す格好の地であったようである。

加茂谷にも平野周辺に、石庵丁、石斧など弥生時代の石器や弥生式土器を出土する遺跡が点在し、上加茂竜王山遺跡、井上遺跡、猪の子遺跡、下加茂内山遺跡、栗根下講地遺跡などがある。^(註2)

また、下加茂の倉田遺跡は、倉田古墳群の存在する山地の支丘をなす丘陵の稜線上に弥生式の大甕が2個、底部をあわせて、口縁部が東西にむいて埋蔵されていたことから、恐らく弥生期の墓棺葬ではないかと推定された。このように弥生時代にはすでに加茂川流域の谷相平野を利用して多くの人々が農耕生活を営んでおり、のちの安那郡に発展する部落国家を形成していたようである。^(註3)

2 古墳時代の加茂谷

神辺平野周辺には数多くの古墳群が存在し、それらの古墳群は多様な性格をもつものが多い。それはとりもなおさず、築造の年代にも関係しているのである。すなわち、箱式石棺の群が山頂から稜線にならぶ、いわゆる前期古墳と考えられるもの、同じく前期から中期にかけて竪穴式石室を有する円墳や前方後円墳、後期の横穴式石室をもつ、独立した前方後円墳や円墳、最末期の横穴式の群集墳がこれである。

前期と思われる古墳群は、下竹田の辺木、江草付近と道上の大附付近、加茂谷に入ると前期から中期の古墳は増大して、芦原の妙音地には12基の竪穴を主体とした円墳が存在し、下っては岡遺跡の西南方の丘陵上に2基の前方後円墳が存在している。後円部直径15m、前方部長さ25mほどの規模のものであるが、いずれも竪穴式石室をもつ中期古墳と考えられる。さらに駅家町掛迫地区には前方後円墳1基を含めて8基の小円墳、ひきつづいてその北方に草広・栗塚・狼塚と現存する15基の群集した小円墳が存在する。これらはいずれも前期から中期に築造されたものと考えられる。

さらに古墳時代後期の横穴式石室をもつものは、急激に増大し、神辺町御野・御領の北部の南面する山腹には200余基の群集横穴式石室墳が存在する。中条にも数10基の横穴式古墳群が密集し、中には大坊古墳などのような全長12

第2図 神辺平野周辺古墳分布図（○印は同遺跡）



第1表 神辺平野周辺古墳地名表

番号	名 称	所 在 地	備 考
1	服部本郷北古墳群	芦原郡駅家町服部本郷	3 基
2	服部下組古墳群	・ 〃 〃 下組	3 基
3	服部下組東古墳群	・ 〃 〃 〃	3 基
4	服部永谷北古墳群	・ 〃 〃 永谷	5 基 県史跡・大迫古墳を含む
5	大迫古墳群	・ 〃 新山字大迫	5 基
6	大佐山古墳群	・ 新市町中戸字大佐山	県史跡大佐山白塚古墳を含む
7	大池西古墳群	・ 駅家町新山	7 基 4 基
8	小山田古墳群	・ 〃 〃	21 基
9	二子塚古墳	・ 〃 新山字切池 中島字池の内	県史跡 前方後円墳
10	中島古墳群	・ 〃 中島	8 基
11	服部永谷古墳群	・ 〃 服部永谷	13 基
12	西法成寺古墳群	・ 〃 法成寺	14 基
13	山の神古墳	・ 〃 〃 字田中	県史跡 前方後円墳

14	栗塚古墳群	◆ ◆ ◆	字栗塚	3 基
15	草広古墳群	◆ ◆ ◆	字草広	2 基
16	狼塚古墳群	◆ ◆ ◆	字狼塚	10 基
17	掛迫古墳群	◆ ◆ ◆	字掛迫	前方後円墳 1基を含む 8基
18	土井古墳群	深安郡加茂町栗根字土井		3 基
19	青塚古墳群	◆ ◆ ◆	字因川	2 基
20	永久地奥古墳群	◆ ◆ ◆	芦原字永久地	12 基
21	永久地古墳群	◆ ◆ ◆		8 基
22	妙音地古墳群	◆ ◆ ◆	字妙音地	12 基
23	落石古墳群	◆ ◆ ◆	下加茂字東字代	12 基
24	倉田古墳群	◆ ◆ ◆	字倉田	3 基
25	猪の子古墳	◆ ◆ ◆	字猪の子	県史跡円墳
26	正福寺裏山古墳群	◆ ◆ ◆	字中組	前方後円墳 2 基
27	高追古墳群	◆	神辺町東中条字高追	5 基
28	土井古墳群	◆ ◆ ◆	字上井	5 基
29	大坊古墳	◆ ◆ ◆	西中条字大坊	
30	ヒジリ坂古墳群	◆ ◆ ◆	西中条字ヒジリ坂	4 基
31	安光古墳群	◆ ◆ ◆	字安光	9 基
32	白石古墳群	◆ ◆ ◆	東中条字大藏	6 基
33	駒ヶ爪古墳群	◆ ◆ ◆	字駒ヶ爪	8 基
34	深水古墳群	◆ ◆ ◆	西中条字深水	4 基
35	深水東古墳群	◆ ◆ ◆ ◆		7 基
36	藤森古墳群	◆ ◆ ◆	字藤森	6 基
37	追山古墳群	◆ ◆ ◆	湯田字本湯野	14 基
38	圓分寺裏山古墳群	◆ ◆ ◆	下御領字圓分寺	3 基
39	下御領古墳群	◆ ◆ ◆		39 基
40	上御領下組古墳群	◆ ◆ ◆	上御領字下組	22 基

m におよぶ巨大な横穴式石室で切石を使用して築造されたものも存在する。

加茂谷の後期古墳は、谷の最奥の山地に、土井古墳群 3 基にはじまり、青塚 2 基、永久地奥 12 基、永久地 8 基、落石 12 基などがある。^(註 4)

さらに平野部の入口には、山の神古墳や新山二子塚のように県指定史跡となっている巨大な前方後円墳が存在し、付近を治めた豪族のものと推定されている。

服部谷に入ると、県史跡の大迫金環塚や家形石棺などの特徴ある古墳が存在して、古墳時代後期にいかに繁栄したかを物語っている。出土遺物も優秀な副葬品が多く、中条国成古墳の有孔円板や掛迫古墳のダ龍鏡、山の神古墳の金装^(註5)の馬具など目立っている。

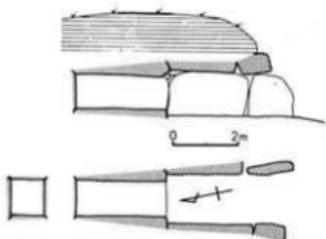
3 岡遺跡周辺の古墳時代遺跡

今回の発掘調査地において、はしなくも当初寺城と思われていた地域から埴輪円筒をもつ古墳の周濠が発見されたが、遺跡周辺には多くの古墳が密集している様子で、遺跡はこれらの古墳の数基を破壊して土地造成が行なわれた様子である。このことは遺跡のすぐ北に接して箱式石棺が存在しているのでも判明する。

岡遺跡のある丘より、小流をはさんだ西側には江木神社が奉祠されている小丘陵があるが、ここには、県史跡に指定されている猪の子古墳^(註7)がある。この古墳の石室は妻入りの石棺に羨道をつけた型式で、薄葬令後の豪族の單墓と考



第3図 猪の子古墳石室全景



第4図 猪の子古墳実測図

えられており、古墳時代終末期を物語る古墳である。石室は、5枚の巨岩で組み合せて造られ、内法長さ2.85m、幅1.05m、高さ0.89mで、羨道は心もち外方に拡がり、奥行は東壁で3.9m、西壁は3.5m、幅1.48m、入口では幅1.7m、高1.35mを測り天井石は巨岩2枚で、側石はいづれも巨大な2枚の切石で築成されている。早くから開口されているために副葬品などは見られない。なお、同じ丘陵内に、未発掘の横穴式石室らしい古墳が存在している。この2つの古

墳の北にあたり、江木神社の北西隅に、黒色有機土層が堆積し、炭化したもみなどが出土している。また、後期弥生式土器も多量に出土している。この猪の子古墳のさらに西方の谷相には倉田古墳群が存在し、弥生式の壺棺の出土した倉田遺跡もすぐ接して存在する。

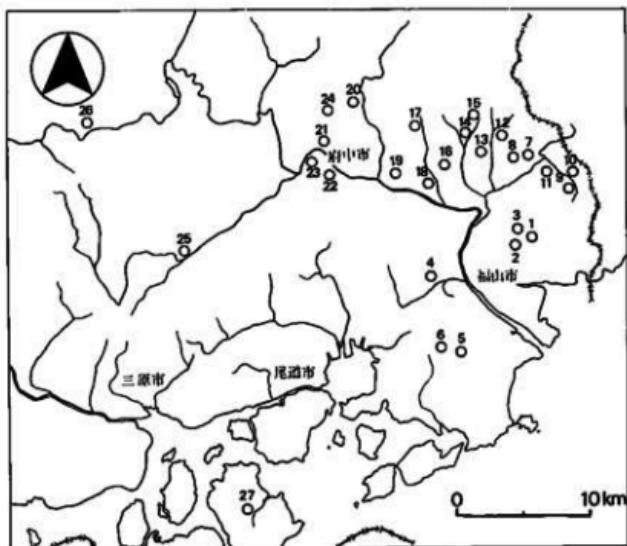
なお、岡遺跡の背後となる北につづく尾根と山塊は、先に記した永久地や妙首地古墳群の存在する山地につづく一連のものである。

これら古墳の被葬者の後裔がのちの寺院造立に關係あるものと見られ、特に猪の子古墳の被葬者と岡遺跡との關係が考えられる。

4 奈良時代の遺跡

奈良時代前期（白鳳時代）の遺跡としては、備後國府が設置された現府中市の伝吉田寺跡と國府の南に存在する栗柄廃寺跡があげられる。

天平期に入ると岡遺跡の南東、神辺平野の中央に存在する神辺町御領には国



第5図 備後南部古代寺院関係遺跡分布図

第2表 優後南部古代寺院跡・古瓦出土地・瓦窯跡 一覧表

番号	所 在 地	名 称	遺 構	軒丸瓦	軒平瓦	其の他の遺物	時 代
1	福山市鹿王町宮ノ前	宮ノ前庭寺跡 (庭落藏寺跡)	塔跡・金堂跡	蓮華文 重櫻文	唐草文 忍冬文	地仏・土師器・須恵器・鉢・文字瓦・丸瓦	白鳳 天平
2	◆ 東深津町原山	原山庭寺跡	礎石	蓮華文	唐草文	土師器・須恵器・鉢	天平
3	◆ 千田町藏王原	藏王原庭寺跡		蓮華文			天平
4	◆ 津之郷町坂部	庭和光寺跡	塔中心礎石	蓮華文	唐草文	土師器・須恵器・鉢 丸瓦風瓦	天平 平安
5	◆ 熊野町六本堂	宮淨高寺跡 (六本堂庭寺跡)			唐草文		天平
6	◆ ◆ 大富	大富草田瓦窯跡	2基	蓮華文			天平
7	深安郡神迎町御領	国分寺跡	礎石	蓮華文 重櫻文	唐草文 重張文	土師器・須恵器	天平
8	◆ ◆ 港野	小山逆馬寺跡 (國分尼寺跡)	礎石	蓮華文 重櫻文	唐草文 重張文	土師器・須恵器	天平
9	◆ ◆ 上竹田、内砂子	内砂子庭寺跡		蓮華文	唐草文	棟先瓦	天平
10	◆ ◆ 川谷	川谷造跡	礎石	蓮華文			天平
11	◆ 下竹田塔谷	塔谷南寺跡	礎石	蓮華文	唐草文		平安
12	◆ 東中条秀工地	秀工地遺跡		蓮華文	重張文		天平
13	◆ 道上 中谷	中谷南寺跡		蓮華文	重張文	地仏	天平
14	加茂町中組 四	岡遺跡	礎石	蓮華文	唐草文	須恵器・土師器 須恵器	天平
15	◆ 中野	魔法光寺跡			唐草文		天平
16	芦品郡駄町法成寺西組	法成寺跡	礎石	蓮華文	唐草文	土師器・鉢・文字瓦	天平 平安
17	◆ 跡元市場	市場南寺跡		蓮華文	重張文	須恵器・土師器・鉢	天平
18	◆ 中島	庭長明寺跡	礎石	蓮華文	唐草文		天平
19	新市町上戸手	鹿鳴寺跡	礎石	蓮華文	唐草文	筒形土瓶品	天平
20	◆ 常 鶴原	朝原南寺跡		蓮華文	唐草文		天平
21	府中市元町	佐吉田寺跡 (町庭寺跡)	塔跡・金堂跡 講堂跡	蓮華文	忍冬文	須恵器・土師器 鉢・人物纹瓦	白鳳
22	◆ 栗柄町栗柄	栗柄南寺跡		蓮華文	忍冬文		白鳳 天平
23	◆ 父石町前坂	父石造跡		蓮華文	唐草文	棟先瓦	天平
24	府中市本山町	青目寺跡	◆			鐵釘・その他	平安
25	御調郡御調町丸門田	本郷平鹿寺跡	塔中心礎石 礎石	蓮華文	重張文		百鳳 天平
26	世羅郡世羅町寺町	鹿鳴寺跡	礎石	蓮華文		錐尾	白鳳
27	因島市中ノ庄町惣見	惣見南寺跡		蓮華文	唐草文	土師器・須恵器 開元通宝	平安

分僧・尼寺が存在し、なお付近には、神辺町に内砂子、川谷、塔谷、秀工地、
(註3)
中谷の諸寺院関係遺跡が点在する。駅家町には魔法成寺跡、市場廃寺跡、廢最
明寺跡が連なっている。

こうして神辺平野の周辺で現在確認されているもので12か所の寺院関係遺跡
が存在する。

また、遺跡の北方に連なる山塊のわづか1000mのところに現在法光寺が存在
するが、こここの墓地から一個の唐草文瓦が出土している。他に布目瓦が多く出
土するので建築物が存在したものと考えられるが、礎石などは現在まだみつか
っていない。墓域を掘ると瓦が出土するといわれているので相当深く埋れてい
ると思われる。軒平瓦は周縁に2重にめぐらされた線の間に連珠文を配し、非
常に精巧な唐草文を描いている。天平時代のものと考えられるが、遺構の発掘
がなされていない現状では、寺院跡との断定ができないし、岡遺跡との関連も
後考にまつ外はない。

(村上正名)

註1 日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』(昭和36年)

註2 文化財保護委員会『全国遺跡地図(広島県)』(昭和42年)

註3 村上正名「芦田川流域」(『備後南部の考古学的基礎調査』昭和38年)

註4 註2と同じ

註5 村上正名「国成古墳」(神辺町文化財シリーズNo.1 昭和40年)

註6 掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」(芸備文化第5・6合併号 昭和31年)

註7 豊元国「備後における三個の特殊石室墳」(『広島県史跡名勝天然記念物調
査報告』第6輯 昭和26年)

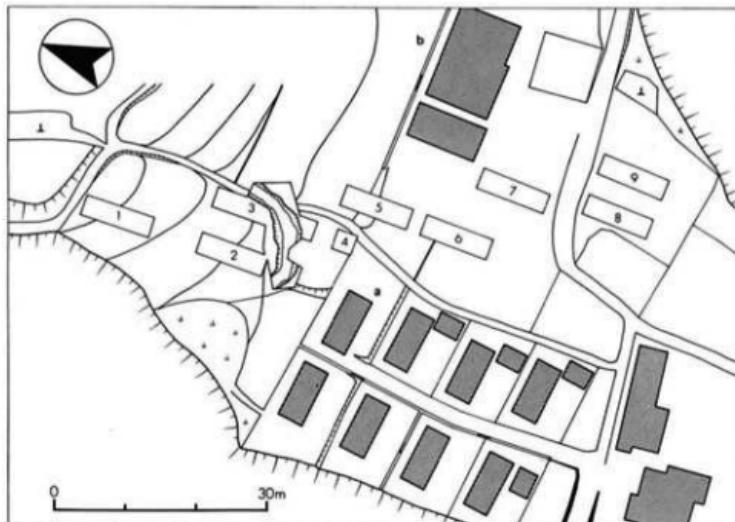
註8 村上正名「備後国分寺」(神辺町文化財シリーズNo.2 昭和41年)

III 調査区の設定と調査の概要

本調査は道路建設工事に伴う、埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査であり、その性格上調査範囲は一応道路建設予定地以内と限定された。

南に延びる舌状台地をほぼ南北に縦断する道路建設予定地は、平均幅17m、丘陵部分の長さ約90m、高低差4~4.5mでやや西に偏して南から北へ突き抜けている。

調査区の設定については、地元の人達の「a 地点付近で昔、町営住宅建設の際に軒丸瓦、軒平瓦、重圈文鬼瓦等の瓦類が出土した」という話と、荒神社跡が10m四方の広さに0.5mばかりの高まりを持っているという2点を重視しこの付近を一応の重点地域とし、磁北に平行する10m×3mの細長い調査区を全域



第6図 調査区配置図 (a・bは古瓦出土地点)

に設定した。

まず北側の第1区では、区北端の深さ1.5mの辺りで荒い砂層に達した。地表よりその砂層までの間には若干の瓦片、土師器、須恵器等土器片の出土を見るが、何ら造構らしきものの検出はなかった。

第2区は、第1区の南方延長に7mの間隔を置いて設置した。区の中央部の地表下0.7m余りの地点から、小兒頭大の川原石10数個の集団を見るが、地層の観察でも何ら基壇状のものが見られず砂層の上に乗っている状態であり瓦類の出土も殆んど無い事から建築造構とは認められなかった。

第3区は、第2区の東方に4m隔てて設定したが、さらに南へ5m延長して15m×3mの区とした。したがってその一部は前述した荒神社跡の高まりを切断することとなった。荒神社跡の高まりは付近の畑開墾の際に出土した瓦類の棄て場所でしかなく多数の男瓦、女瓦と若干の軒丸瓦、軒平瓦が出土ただけで、寺院造構に結びつかなかった。区南寄りの地表下1mの砂層上面に幅3m程の東西方向に延びる黒褐色有機土層が検出された。この土は砂層をU字状に掘りこんだ溝中につまっており、中に多数の埴輪円筒片を含むことから、古墳周濠跡の可能性を持ち、東西に道路建設予定幅一杯まで拡大してこれを拡張区とした。この結果濠は多くの埴輪片の出土とともに調査区一杯まで東西に弧を描いて続いた。復原推定により直径約20mの円墳の周囲に幅2.0~3.5mで取り付く周濠南側部分と判断できた。なお、調査区中に動いて現地を離れているが、礎石に使用したと考えられる径0.5m程の石が一個出土した。

第4区は、第3区の南方に3mを隔てて、3m×3mで設置した。この地点はa地点に近く期待をかけたが、地表下0.8mで地山に達し造構は検出されなかった。

第5区は、第3区の東に3m、南に2m隔てて10m×3mで設けたが、土器片が若干検出されるのみで、地表下1~1.2mで地山砂層に達した。

第6区は、第5区の南方に2m間を置いて設定したが造構は発見できなかった。北側山際より緩かに下降してきた台地もこの第6区辺りまで来ると殆んど傾

斜がなくなり、砂層地山面も地表よりわずか0.5mの深さになっている。

第7区は第6区から東へ6m、南に5mずらせた平行な区である。つい最近まで民家が建っており、民家の基礎コンクリートを壊しながらの発掘であった。調査区内の3地点で弥生式土器等の出土をみた。北側地点では鉢形土器、中央地点は土師器の丸底部のみ、南側地点は小形壺形土器等であった。いずれも現地表下0.3m程の砂層上面にあり、民家建設の際にもかろうじて破壊を免がれたものと思われる。遺構は検出できなかった。

第8区、9区は、第7区南西隅より南へ5m、東へ2mと8mの地点よりそれぞれ設定した。いずれの区でも若干の土器片が出土するのみで地山砂層に達した。なお、縄文式土器片も検出された。

(鹿見啓太郎)

発掘調査日誌

昭和46年

12月13日（月）晴

午後3時より慰靈祭を行なった。その後、現地において明日からの発掘調査について話合った。

12月14日（火）曇一時小雨

調査予定地の北西端に第1トレンチ、その南に第2トレンチを設定し発掘調査を開始した。第1トレンチからは布目瓦・土師質土器・須恵器などの破片が発見された。

第2トレンチは表土を剥ぐにとどまった。

12月15日（水）晴時々曇

第1トレンチ—清掃し写真撮影を完了する。

第2トレンチ—土師質土器片を伴なう石列が見られたが、遺構面としてとらえることはできなかった。軒丸瓦片が1点出土した。清掃し写真撮影を完了した。

第3トレンチを第2トレンチの東に設定し排土作業を開始する。南寄りの黒褐色土層より埴輪円筒片が多数出土した。古墳の周濠部の可能性が強い。

地形測量を開始した。

12月16日（木）晴

第3トレント—埴輪片が多数見られるので南へ拡張した。埴輪片と共に縄文式土器・弥生式土器・須恵器などの破片も出土した。

第5トレントを第3トレントの南東部に設定し排土作業を開始した。

12月17日（金）晴

第3トレント—引き続き黒褐色土層から埴輪片が出土した。地山を掘り込んだU字形の古墳であることが確認された。

第4・第6トレントを第3・第5トレントの南に設定し、排土作業を行なう。

12月18日（土）晴

第1・第2・第5トレントの実測を完了する。第3・第6トレントでは引き続き作業を行ない、第7トレントを第6トレントの東側に設定し排土作業を開始する。

12月20日（月）晴

第7トレント—弥生式土器が多数出土した。

第3トレントの埴輪片を含む黒褐色土層を追うため、第3トレントの西側に拡張区を設定した。第7トレントの南にも第8トレントを設定し排土作業を開始した。

12月21日（火）晴

第3トレント西拡張区—瓦と共に礎石が発見されたが動かされたものようである。黒褐色土層からは埴輪片が多数出土した。

第5トレントの写真撮影を完了した。第8トレントの東に第9トレントを設定した。

12月22日（水）晴

第3トレント東壁の実測と写真撮影を完了し、黒褐色土層を追うため東拡張区を設定した。遺跡遺景の写真撮影を行なう。

12月23日（木）晴

第3トレンチ東拡張区・西拡張区からは埴輪片が出土した。両区とも清掃後写真撮影を完了した。

12月24日（金）晴

第3トレンチ西拡張区から東拡張区に続く周濠の実測を行なう。地形測量も完了した。

12月25日（土）晴

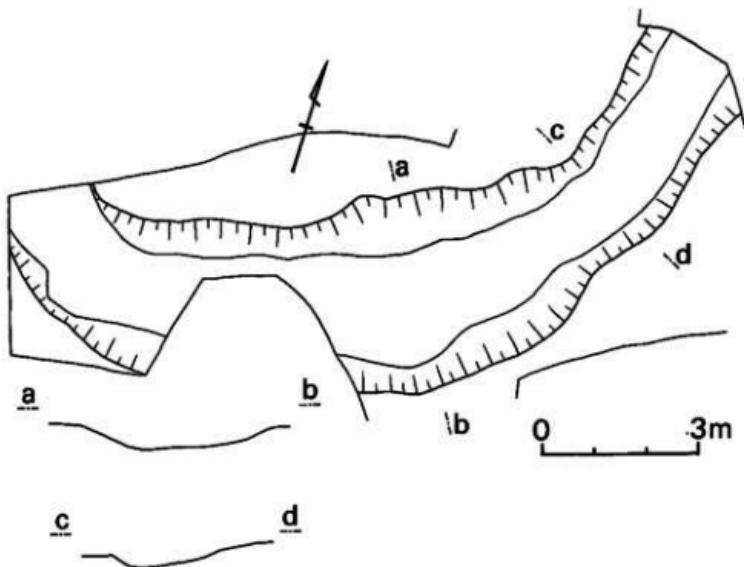
出土遺物・調査用具を整理し、調査をすべて終了した。

（篠原芳秀）

IV 遺構

寺院跡の遺構確認のため、9か所のトレンチを南北に設定し、排土作業を行なった。しかし、第2・3区拡張区より、動かされた礎石ではないかと推定される石が1個と、開墾中地表近くより出土したものを一か所に集めたものと思われる瓦片が多数出土したほかは、寺院関係の遺構は何ら検出されず、また、今回の調査区の表土層下からも瓦片はほとんど出土しなかった。

このことからみて、バイパス建設予定地より西側の地域には、寺院関係の遺構は存在しないものと考えられる。しかし、東側には、相当の広がりをもつ緩傾斜地があり遺構の存在が推定されるが、なお今後の調査検討をまたねばならない。



第7図 古墳周辺実測図

このように丘陵先端部西側からは寺院関係の遺構は検出されなかったが、第2・第3区の地表下約1mのところから周濠をもつ古墳の基底部が発見された。

封土はすべて削平されており古墳の形態や規模については、あきらかにしがたいが、周濠からみて、径約20m前後の円墳と推定された。

周濠は、幅2.0~3.5m、深さ25~40mのU字状の溝で、花崗岩の風化した地山を掘り込んでおり、中には黒褐色土が15~35cmほど堆積していた。黒褐色土層上面およびその中よりかなり破壊された埴輪円筒片が多数出土した。埴輪は、第3区西南端部および拡張区の周濠黒褐色土中より多数出土し、第2・3区拡張区西寄りでは黒褐色土より上の固い灰褐色土層中よりも出土した。

埴輪は原位置にあるものではなく、ほとんどが、周濠内より出土していることからみて、元来の分布状態を知ることは不可能である。また、埴輪の焼成は、十分とはいいがたいものがほとんどで、もろかったが、粘土はかなり精選されているようである。その表面には、ハケ目痕がついており、赤色顔料をほどこしてあるものも少し出土した。

(山県 元)

V 遺物

今回の調査によって出土した遺物には、縄文式土器、弥生式土器、小破片の須恵器、円筒埴輪、瓦類、土師質土器などがあったが、円筒埴輪をのぞくもの以外は造構に伴わず、単独的に出土した。

a. 縄文式土器

第6区および第2・3拡張区から6点出土したが、図示したもの以外は無文土器であった。

(1)、粗い縄文地のうえに0.2~0.8cmのヘラによる沈線があり、口縁はやや内傾している。焼成は良好で、若干の砂粒を含み、色調は暗褐色を呈している。縄文後期前半頃の中津式に相当するものであろう。



第8図 縄文式土器撮影

(2)、口縁部で、器壁は比較的厚くやや外反する。口縁近くに突帶をもち、その上に指頭による凹みがみられる。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈している。

(3)、器壁は薄く外反する口縁部で、口唇に刻み目があり、また、そこより3.7cm下に薄い突帶をもう1条もうけ、刻み目が配されている。焼成は不良で、胎土にはかなりの量の砂粒が含まれる。色調は暗褐色を呈している。

(4), 器壁は厚く、口縁部は外反する。口縁より5cm下にヘラによる沈線が1条みとめられるほか無文地である。焼成は良好で暗褐色を呈している。

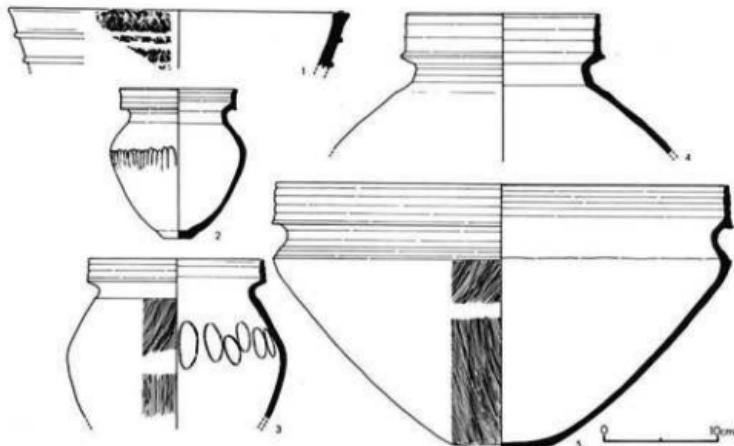
(5), 胸部にかけて若干張りがみられるもので、この張りだし部分に1条の沈線が認められるほかは無文である。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。

(2)から(5)は、縄文晩期黒土B II式に相当するものと考えられる。

b. 弥生式土器

ほぼ完形を呈す壺形土器、鉢形土器が第7区から出土した。

(1), 復原口径30.0cmをはかるもので、口縁部は外反する。口唇部分には、3条の凹線があり、その上に円形浮文が点在的に配されている。口縁部には0.4cmあまりの凸帯が2条ほどあり、この間にヘラ描による鋸歯の文様が認められる。焼成は良好で赤褐色を呈している。弥生中期中葉に位置づけられるものであろう。



第9図 弥生式土器実測図

(2), 比較的小型の壺形土器で、口縁部径10.4cm, 器高13.0cm, 脊部最大径12.0cm, 底部径2.4cmをはかる。口縁部はやや内傾気味であるが、先端部分で外反し、この部分には浅い3条の凹線がある。脊部中央部にはヘラによる縦の調整痕が顕著にみとめられる。底部は丸味を帯びており、不安定である。焼成は良好で赤褐色を呈している。

(3), 口縁部径15.3cm, 脊部最大径19.2cmを計測する。口縁は内傾するもので、3条の凹線があり、肩部から脊部にかけて段がつく。脊部より上面にはハケによる斜位の調整痕が顕著にあり、また、下の部分には縦方向のヘラ削りが認められる。内面には口縁から肩部にかけてハケによる横位の調整がなされ、脊部最大径部分には指頭圧痕が顕著に認められる。その下には横位のヘラ削りが行なわれている。焼成良好で、赤褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含んでいる。

(4), 口縁部径17.6cmをはかるもので、その部分には浅い凹線が内外面に3条あり、直立する。また、外面肩部に非常に浅い凸帶が1条みられる。焼成は良好で、黄褐色を呈している。

(5), 鉢形土器で、口縁部径39.6cm, 器高23.0cm, 底部径8.7cm, また、脊部最大径は肩部から脊部にかかる部分で40.0cmをはかり、大きさの割には器壁は0.5cmで薄い。口縁部は直立気味に立上り、それに浅い5条の凹線が認められ内面にはやや幅広い2条の凹線がある。また、肩部にも浅い3条の凹線があり、これより下側にヘラによる縦の調整がなされ、さらに内面には横のヘラ削りがなされている。底部は水平でなく丸味を帯びる。焼成は良好で茶褐色を呈している。

(2)から(5)は弥生時代後期後半に比定することができよう。

c. 壇 輪

原位置のわかるものはなく、すべて、小破片となって出土したもので、全高をうかがえるものはない。朝顔形円筒をなすもの(1・2)と通常の円筒(3~5)および基底部(6~11)とがあり、一部には朱彩されたものもある。

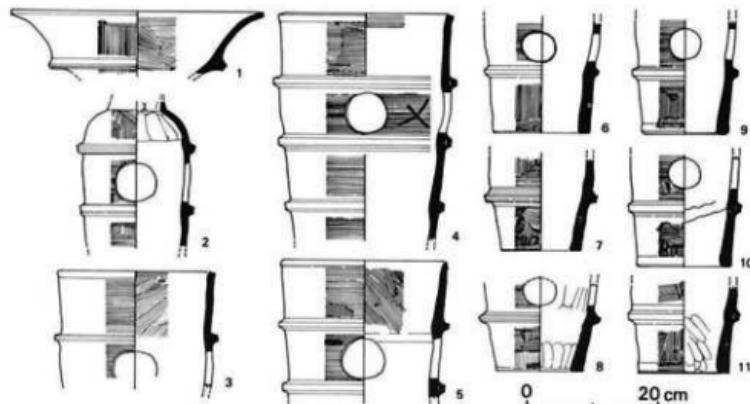
(1), 口縁部径38.4cmで、大きく外反している。焼成は比較的良好で赤褐色を呈している。またハケによる成形があり、外面には縦方向に、内面は、斜位、縦、横位の方向になされている。

(2), 朝顔形の円筒埴輪と考えられるもので、上面を欠失している。隆帯は2本認められ、この間に径6.2cmのすかし孔があり、外面には縦、横、斜位のハケ目がある。内面は、肩部に指頭による成形がなされ、焼成は良好である。

(3), 通常の円筒埴輪で、隆帯が1条あり、口縁部端はやや丸味を帯びて外反する。外面には横位のハケ目が、内面には隆帯部分まで斜位のハケ目で成形されている。焼成は良好で赤褐色を呈している。

(4), 隆帯は3条あり、口縁部径24.8cmをはかる。2段と3段との間にはすかし孔がみられ、それに接して×字状の窓印がある。外面は横位のハケ目で成形され、また、内面は口縁上端に横位のハケ目がある。口縁端は(3)と同様である。焼成は良好で赤褐色を呈している。

(5), 口縁部径24.8cmで、隆帯が2条あり、口縁端はくの字状に立ち上る。



第10図 塩輪実測図

外面には横位のハケ目が、また、内面には第1の凸帯まで斜位のハケ目がある。焼成は不良で、白みのつよい褐色を呈している。

(6) 基底部分のみで、1条の凸帯が存し、全体にやや外反する。ハケによる成形は外面だけで、縦、横の方向になされている。焼成は不良である。

(7) 基底部径13.2cmで、上方は外反する。焼成良好で赤褐色を呈し、部分的に指頭による成形がみられる。

(8) 基底部径が比較的大きめで、全体に大きく外反する。すかし孔は小さめで、内面には指頭による成形が顕著である。

(9) 基底部径13.2cmで小さく、垂直気味に立ち上がる。焼成は不良で白みのつよい褐色を呈している。外面には、縦、横、斜位のハケ目がある。

(10) (9) とほぼ同様の立ち上がりで、基底部径14.4cm、すかし孔径4.4cmをはかり、隆帯部分の内面に縦目痕が顕著である。

(11) 焼成は良好で赤褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含んでいる。内面
(是光吉基)

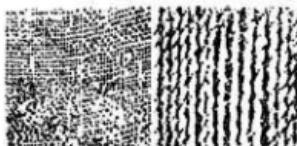
d. 古 瓦 類

今回の調査において出土した古瓦類のうち軒丸瓦は2種類4個体、軒平瓦は1片のみの非常に少量であった。幸い以前遺跡付近で出土した軒丸瓦、軒平瓦および鬼瓦について、地元の三好喜三郎氏が所蔵されていたので、ご好意により一緒に紹介を兼ねて掲載させていただいた。それをもあわせると軒丸瓦は4種類、軒平瓦は2種類および鬼瓦2種類に分類できた。

丸瓦、平瓦ともに破碎のため小片であったが、彎曲の内側に布目痕、外側に縄目叩痕が見られ、格子目叩痕は見られなかった。

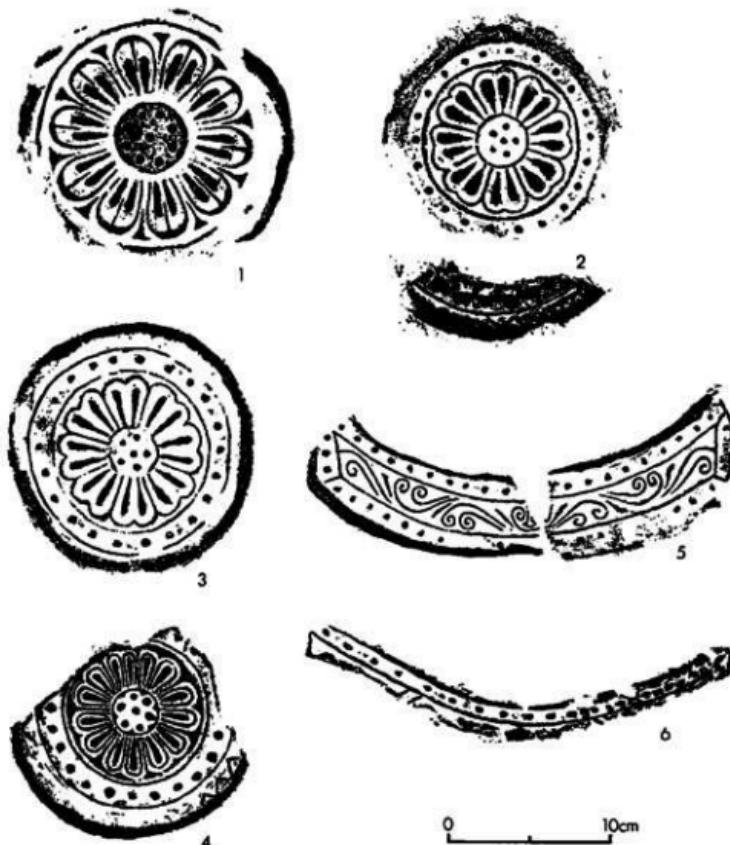
丸瓦は玉縁のついたものばかりであった。

第11図 九瓦・平瓦の文様



軒丸瓦（第12図）

1は複弁蓮華文軒丸瓦で直径16.2cm、突出したやや大きめの中房内に1+8の蓮子を持ち、10葉の複弁の外側に高い素縁が廻るものである。全体として焼成が悪く、やや磨滅しているが子葉は細く盛り上がり精巧な造りである。下頸部の厚さは2.7cmである。



第12図 同造跡出土古瓦拓影

2と3は複弁蓮華文軒丸瓦である。いずれも一重圓線に囲まれた平坦な中房に1+5の蓮子を持ち、8葉の複弁の外側に22個の珠文が廻るものである。2は直径15.0cm中房圓線が明瞭で花弁はややふくらみ気味であり周縁内側に内向の線鋸齒文が廻る。下頸部の厚さは3.5cmである。3は直径15.0cm、中房圓線が切れ切れではっきりせず、花弁は細く硬い感じで周縁は素縁である。下頸の厚さは3.6cmである。焼成はどちらも良好であるが表面は荒れている。2については周縁部分が剝離していて不明であるが、周縁に線鋸齒文を有する破片が出土したことや、備後南部に分布する他の遺跡から出土した軒丸瓦との比較から、線鋸齒文を有する軒丸瓦と断定してよいであろう。

4は複弁蓮華文軒丸瓦である。直径は復元推定で15.0cm、内区は突出した中房内に1+6の蓮子と中房縁から内部に向けて6個の三角状文様があり、花弁は2重の複弁7葉である。外区は復元推定24個の珠文帯と周縁内側に内向の線鋸齒文が廻る。下頸部の厚さは4.0cmである。

軒平瓦（第12図）

5は均正唐草文軒平瓦で中心飾に◎を持ち左右に3転する流麗な唐草文があり、上下外区に各々推定21個、左右両脇区に各々3個の珠文を配した美しいものである。上弦幅26.0cm、下弦幅26.5cm、弧深5.4cm、厚さ6.0cm焼成は良好である。

6は瓦当面の下側頸部が剝離しており内容は不明確であるが、上外区の珠文帯と、内区の左右に各々上から派生する2本の唐草文が見えることなどから検討すれば、備南に多く分布出土する中心飾に△を持つ均正唐草文軒平瓦であると判断できよう。上弦幅26.0cm、弧深4.8cmで焼成は堅緻である。

鬼瓦

重圓文鬼瓦で幅29.0cm、高29.0cm、厚5.5cmで、やや高めの無文周縁に内区は2本の圓線が廻り、中央に縦線2本でほぼ中央に径2.0cmの円孔がある。左右均正のとれた美しいもので青灰色を呈し、焼成は良好である。この他にも鬼神面と思われる鬼瓦の破片が出土しており府中高校に所蔵されている。

第3表 岡遺跡出土の古瓦類と
同様の古瓦類を出土する遺跡 一覧表

遺跡名	所在地	軒丸瓦	軒平瓦
原山遺跡	福山市東深津町原山	4	5
宮の前庭寺跡	福山市藏王町宮の前	3	5・6
伝吉田寺跡	府中市元町		6
小山池廬寺跡	深安郡神辺町湯野		6
魔最明寺跡	芦品郡駅家町中島	2・3	5・6
父石遺跡	府中市父石町前原	2・3	5・6
本郷平廬寺跡	御調郡御調町丸門田	3	6
備後國府跡	府中市鶴飼町		6
岡遺跡	深安郡加茂町中野	2・3・4	5・6

番号は第12図と同一



第13図 父石遺跡出土瓦拓影
(府中高校所蔵)



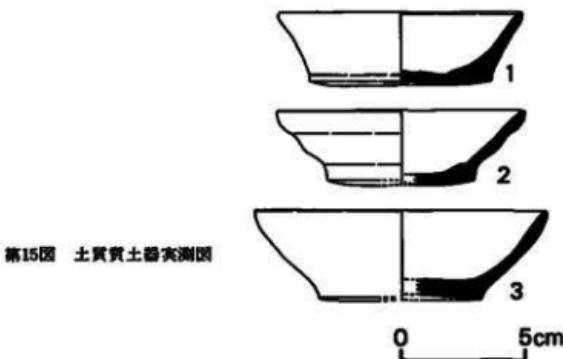
第14図 備後國府跡推定地出土瓦拓影
(府中高校所蔵)

軒丸瓦1は備後南部では類例がなく様式としては白鳳期を思わすが、実年代としては若干下がるものであろう。天平様式を示すと思われる軒丸瓦2・3・4類、軒平瓦5・6類については備後南部に多く分布出土している。その組み合わせ関係は第3表の通りであるが、軒丸瓦2類と軒平瓦5類の組み合わせ、軒丸瓦3類と軒平瓦6類の組み合わせが比較的多く考えられる。しかし、原山遺跡のように軒丸瓦4類と軒平瓦5類の組み合わせもあり、先後関係は明確にはできない。あえていえば、軒丸瓦2・3・4の順に、軒平瓦5・6の順で縦年できるがそれも時代的距りはわずかであろう。備後南部で同類の瓦を出土する遺跡の綿密な調査研究が必要であろう。

(鹿見啓太郎)

● 土質質土器

(1) は、口縁部径9.7cm、器高3.0cm、底部径7.3cmをはかり、底部から口縁部にかけての立ち上りは彎曲気味で、底部はやや丸味をもっている。内外面とも水ひき痕があり、焼成良好で褐色を呈している。



第15図 土質質土器実測図

(2)、口縁部径10.0cm、器高3.0cm、底部径5.9cmを計測する。底部はヘラによる切り離しがあり、丸味を帯びる。底部の立ち上りは垂直気味で、ここから口縁にかけて外反する。内外面とも水ひき痕が頗著である。焼成良好で、胎土に少量の砂粒を含み、褐色を呈している。

(3)、口縁部径11.7cm、器高3.6cm、底部径6.5cmで、内外面とも水ひきが頗著で、底部からの立ち上りは外反するが、口縁部端では内傾気味である。

(是光吉基)

IV 総 括

今回の発掘調査は、道路建設によって遺跡が破壊される恐れがあったことから緊急調査を実施したのであるが、前述したように、国道の通過する地域には、寺院関係の建築遺構は検出されなかった。

しかし、調査地域内からは、新たに古墳の基底部と周濠、それにともなう埴輪円筒の破片が発見された。

神辺平野周辺で埴輪をともなう古墳としては、国成古墳（神辺町西中条）、正福寺裏山古墳（加茂町下加茂）、要害山古墳（神辺町湯田）、山王山古墳（同）、山路七つ塚古墳（加茂町下加茂）などがしらされている。

しかし、これらの古墳は未調査のものが多く内部主体まであきらかにされているものは少ない。

国成古墳は、内部主体に粘土櫛をもつ円墳で、珠文鏡・勾玉・管玉・ガラス小玉、有孔円板などとともに円筒埴輪片が出土しており古墳時代中期のものと推定されている。^(註1) 正福寺裏山古墳は、岡遺跡西側の丘陵上に位置しており、2つの前方後円墳が存在するが葺石とともに埴輪が確認されている。内部主体も竪穴式石室あるいは箱式石棺が想定され古墳時代中期のものと推定されている。^(註2) 要害山古墳、山王山古墳は、後世の削平をうけているためその形態や内部主体はあきらかにしがたいが、いづれも円墳と推定されるもので、埴輪円筒の出土が報告されている。^(註3)

岡遺跡下層から発見された古墳は、その周濠から径約20mの中円墳と推定され、築造された時期も付近に所在するこれらの古墳から古墳時代中期ごろのものと推定できる。

つぎに寺院関係の遺構についてみると、西南隅の地域から特に布目瓦や棟先瓦や瓦のとめ釘などが発見され建築物が存在したことも想定できないこともな

いが遺構は検出されなかった。

しかし、未発掘地である道路東側の畠地が一段高く、平地が存在するが、ここからも耕作中に礎石ならびに布目瓦が発見されたといわれることから、なんらかの建築遺構が存在するものと推定される。

つぎに、推定される建築遺構の創建の年代であるが、発掘された軒瓦からして天平時代に建立されたものと考えられる。このことに関しては、岡遺跡出土の軒瓦が、天平期と推定する他の古代寺院跡出土のものと、同様の文様か、その系統を引く文様であることによって考えられる。

さらに建立者などについては、文献的な資料も、これを立証する考古学的な資料は一切存在しないのでまったく不明である。しかし建立地が、すでに歴史的環境の頃で述べたごとく、岡遺跡をめぐる加茂谷が弥生時代から、農耕を営む人々によって発達し、やがて古墳時代になるとおびただしい墳墓をのこしており、この地方を治める豪族と部落国家の発達が推定でき、勢力のある一族が存在していたことが考えられる。

谷をはさんで西側の丘陵に位置する猪の子古墳は、石室の構造から古墳時代終末期に比定されるものであることから、あるいは、この岡遺跡との密接な関係が考えられるかもしれない。

岡遺跡を含めて、神辺平野には、国分僧・尼寺が神辺町御領と湯野に存在し、その周辺に中条の秀工地遺跡、道上の中谷磨寺跡・駅家町の磨法成寺跡、服部の市場磨寺跡・中島の磨最明寺跡などが谷相の小平野と神辺平野周辺の山麓に点在し、さらに神辺平野の南側には、上竹田の内砂子磨寺跡、同じく塔谷磨寺跡、川谷遺跡といづれも天平時代の特色をもつ古瓦出土地が並んでいる。

岡遺跡出土の軒瓦を備後南部の遺跡出土の古瓦と比較検討してみると第3表で示す如く磨最明寺跡、父石遺跡出土の古瓦類と同様の文様構成をもつものが多く、しかも天平期に比定される磨寺跡出土の古瓦とも類似する傾向をもつことから天平盛時のものと推定できる。いづれにしても神辺平野周辺の寺院関係

遺跡については、調査が進んでいないため、あきらかでない点が多い。このことから岡遺跡の備後南部における編年的位置づけや各遺跡の関係についても不明瞭な点が多いので、今後よりち密な調査研究をまって検討されなければならない問題であろう。

今回の調査地域は、当初廃寺跡の存在が想定されており、それに関係する遺構の発見が予想されるところから遺構発見の際の保存方法について考慮しておく必要があった。しかし幸いにも寺院関係の遺跡は検出されず、古墳の周濠の一部が発見されたにとどまった。

神辺平野周辺の遺跡は、近年宅地造成や工場建設のため消滅する可能性のあるものが多く、今後早急にこれらの保存策を講じなければならないと考えられる。

(村上正名)

註1 村上正名「国成古墳」(神辺町文化財シリーズ No.1. 昭和38年)

註2 + 「芦田川下流域の古墳群Ⅳ」(『古代吉備』5 昭和38年)

註3 「広島県埋蔵文化財包蔵地地名表」

(広島県文化財資料シリーズ第3. 広島県教育委員会 昭和36年)

図 版



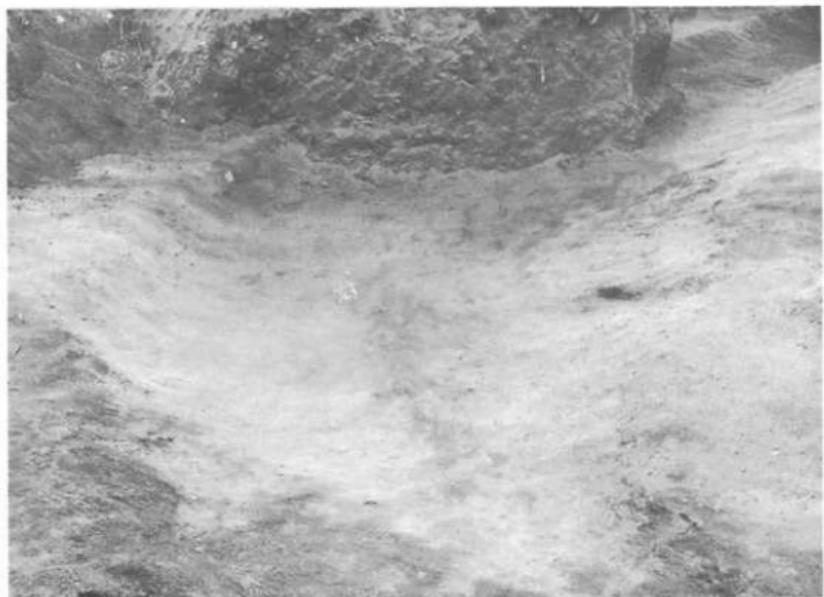
a. 岡遺跡遠景(○印)



b. 同上近景



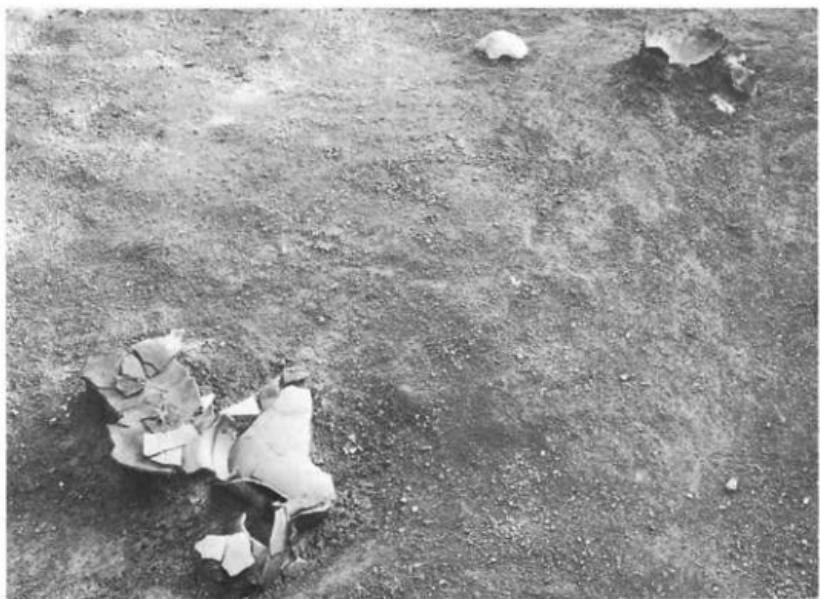
a. 古 墳 周 滝



b. 同 上 部 分



a. 墓輪出土状態



b. 弥生式土器出土状態



a. 楩文式土器



b. 弥生式土器



埴 輪



a. 軒丸瓦



b. 軒平瓦・鬼瓦

昭和47年3月

岡遺跡発掘調査報告書

編集 岡遺跡発掘調査団
発行 広島県
印刷 株式会社柳盛社印刷所